**子育て発達相談室の実践**

千坂克馬（子育て発達相談室　相談員）

**１．沿革と支援内容**

　子育て発達相談室は当NPOこどもサポートネットあいちが重視してきた取り組みの一つです。当初の構想としては乳幼児期の気になる子ども達のサポートを考えていましたが、学齢期の学習支援に対する要望が強く、それに応える形で子育て発達相談室における実践を行ってきました。

　名古屋市にある当相談室をご利用になられる方の社会資源の活用はさまざまですが、名古屋市の療育センターで発達上の相談とサポートを受けられ、学校の支援教室で集団適応上の支援を受け、学習面では公文式の塾を利用することによって基礎学力を付け、体操教室、水泳教室、クッキング教室、絵画教室に通うことによって自らの手足を使っての活動を経験し、大学等の支援サークルの行事などによって社会参加を経験させてあげるなどいろいろな工夫をしておられます。また当事者の方々の自助グループもたくさんあり、それぞれの団体が活発に活動をされており、保護者の方々同士での支え合い、情報交換もよくおこなわれています。保護者の方々のお話によれば現在地域にはさまざまなサポートが充実し、またハンディを持った子ども達への学校の理解、支援は当相談室によるサポートを開始したことによって充実してきているとのことです。

　子ども達はこのようにさまざまなサポートの中から多くのものを身に付けてゆき、また保護者の方々もさまざまな専門的な知識・助言を得ることができます。しかしこうした既存のサポートではむつかしい問題もあります。さまざまなハンディ、中でも“発達しょうがい”と呼ばれる子ども達の多くは自分のスキルや学んだ知識を取りまとめて、何らかの表現あるいは結果を出してゆくことが苦手な子ども達がよくいます。それは文章読解や作文、あるいは情緒・芸術的な表現・鑑賞、登場人物の気持ちの理解の弱さとして現れることがよくあります。ですから保護者の方々の要望として物語を理解して楽しみ、また自分の気持ちや考えを表現できるようなオーダーが出されることとなります。当相談室の支援はほとんどこれになります。そこで何らかの回答をおこなうということは文章表現が中心になるので内的イメージの表出を保障することになり、そのことが自信につながることもあります。

また保護者の方々はさまざまなサポートを受け、また同じ問題をかかえる保護者の方々との交流の中でさまざまな情報を受け取りますが、それら複数の情報は時として整合性が欠けることがあります。当相談室の相談時間は1時間半とたっぷり取ってあり、また充足率も半分くらいなので次のコマが埋まっていないことも多く、じっくりと時間をかけて一緒にその子どもの課題を整理してゆくことが可能です。今年度取り組んできた当相談室における相談室の実践を絵本を中心にご紹介させていただきたいと思います。

**２．絵本と発達支援**

　ここでは絵本を中心とした読書を通しての発達支援を紹介させていただきます。発達上の問題をかかえたお子さんの生きづらさはさまざまですが、その多くは他者と活動を共有してそこから喜びと学びを得ることができないことからくるものだと私は思います。

　読書はテキストを通して作者と会話をするものだともいえます。絵本はその前段階として絵も使って物語などを理解するものです。ただ読書と違い他者と対象を共有し、お互いのやり取りの中でお互いの解釈を投げかけることにより目の前にある絵（対象・概念）の意味を広げていったり、あいまいで言葉にできない意味を明確にすることなどによってお互いの解釈・存在にささえられた意味世界を構築されてゆきます。それは自分のアピールが受け止められ、そこに相手の解釈を重ね、新たな意味を創造してゆく共同活動と言い換えることができます。

　それは発達上とても大きな意味を持つものでありますが、自分のイメージが支持・整理され、そこから一緒に新しいイメージが作り上げてゆくことは内面で他者と繫がっていることを確認できるということであり、幸せで安心・満足を得られ、情緒的な安定をもたらすものでもあることはブックスタートの成果を見ることによっても広く明らかにされていることです。

**３．就学前のお子さんの様子**

**使用した絵本**

「カエルもヒキガエルもうたえる」

アーノルド・ローベル作

エイドリアン・ローベル彩色　アーサー・ビナード訳　長崎出版2010

　あの有名な“がまくんとかえるくん”シリーズの作者、アーノルド・ローベルの未発表の鉛筆原稿が発見されました。しかしこの時アーノルド・ローベルはすでに天に召されて久しく、娘のエイドリアン・ローベルがアーノルド・ローベルの描線を生かすために透明水彩で薄く輝くように彩色して完成させました。まだ“がまくん”と“かえるくん”の名前では登場しませんが、登場するのはさまざまな可愛らしいかえるで、その中にまだ名前こそないものの“がまくん”らしきひきがえると“かえるくん”らしいあまがえるが登場します。見開きのページの左側にきれいな絵が1枚描かれており、右側に大きくプリントされたひらがなだけを使った短い物語が描かれ、それぞれのページは1話完結となっています。こうした形の絵本はひらがなを覚えたばかりのお子さんにとって読みやすいものであり、またお話の結末がそのページに書かれていることから読み通せるという安心感を子ども達に抱かせるものでもあります。

**このお子さんの様子**

　このお子さんは「来年小学校に入学しますが、字を読むのが苦手で不正確であり、また本を読む時に落ち着かずに心配なので、何とかお願いします」というご相談で当相談室にみえました。私が思うにおとなしく親和的な印象を与えるお子さんでした。お母さんが話されるには本児はおとなしい赤ちゃんでしたが、小さな音に驚いたりと言った過敏さがあり、また姿勢や体や手を動かしたりすることについて特に協調的に動かすことが苦手であったそうです。現在では工作や絵を描くことは大好きだけれども、相手のしゃべる言葉のひとつひとつの音の聞き取りが不正確なことがあり、また相手とテンポがずれてみんなとの遊びになかなか入ってゆけないとのことでした。当相談室でアセスメントをおこなったところ発達は全般に良好で聴覚―運動系の弱さ、抽象的な課題は良好だけれども一般的な課題（その課題だけの一般的な言語理解が求められます）が苦手なこと、視線と手の動きの協応が苦手なことが明らかとなりました。

　このお子さんは知覚の調整や体の動きの協調的な動きがやや苦手であり、そのことが相手の言葉と自分自身の活動をうまく繋げてゆくことの苦手さを引き起こし、その苦手意識が顕著に現れたのが本読みだったのではないかと私は考えました。さまざまな支援が考えられますが、私は字を読むことを中心に支援を考えてみました。

**支援の内容**

　まず本を読むことに対する苦手意識を何とかするこが第1の課題となります。そこで本読みと並行しながらいくつかの課題を実施しました。こうした子ども達の常として特殊音節の理解が困難だということがありましたので、まずそれを意識してもらう方法を考えました。コミュニケーションは良好であったため、・・・などひとつひとつのひらがなを組み合わせることにより言葉を構成するゲームを保護者も交えておこないました。本児はこれに喜んで取り組み、そこでは特殊音節にぶつかると相手に尋ねながらもそれを意識することができました。

　次に字を読む練習をおこないつつ本読みをおこないました。まずパソコンソフト“読字トレーニング”（理学館）を使用してひらがな読みの練習をおこないました。またドリル

　本読みに関しては本児に読んでもらい、次に私が読んでみせ、最後に読むべき字をハイライトにできる読字支援ソフト”読んでみよう“を使って文章を読み、絵本の内容に関する簡単な質問（誰が何をしましたか等）を尋ねるワークシートを記入してもらいました。当初はすぐに「もうつかれた」と言って寝転んでいたことが多く、また字の読み間違いも目立っていたのですが、だんだんエラーも少なくなり、読み方はぎこちないものの短い文章ではありますが最後まで読み通すことができるようになりました。また家庭においてはお父さんに本を読んであげたと聞きました。

**考　察**

　本児は乳幼児期より知覚と身体機能の調整困難さによりいくつかの活動の統合がむつかしかったものと考えられます。それはひとつには友達同士とのかかわりの困難さにつながり、また小学校に入学してからの学習活動に取り組む条件としての”読む“ということへの苦手意識にもつながったものと考えられます。ただ本児はこの段階までに自分自身の活動を目的に合わせて調整することはできており、そのことが工作や描画の楽しさを知ることにつながったものと考えられます。しかし他者とのやり取りの中で活動を展開するレベルには至っていなかったものと考えられます。

　本児はコミュニケーション、表象理解、文章の構成そのものには問題はなく、ただ言葉を構成する”音“の活動場面（会話と読書）における理解と活用に困難をきたしていた可能性があります。ゲームによる“音”のやり取りはコミュニカブルな活動を求めていた本児には楽しいものであり、またゲームに“音”のやり取りを乗せることで、それまで一般会話の素早いテンポの中でとらえられなかった“音”と“言葉”を相互作用に乗せることができたと考えられます。そのことは“言葉”を本児の能力・テンポに合わせて保護者を交えた大人が手伝い、本児の”音“の理解と活用のための足場をつくることになったものと考えられます。

　こうして本児は”音“を我が物として活用できるようになり、安心できる家庭においてまず保護者に対して「本を読んであげる」という積極的な行動に出たものと考えられ、こうしたことの繰り返しにより読書活動に自信を取り戻すことができるならば、小学校進学後の学習活動への参加においても不安はそれほど強く感じることはないと思われます。

**４．小学校低学年のお子さんの様子**

**使用した絵本**

「にげないぞステゴサウルウス」

たかはしよいち文　伊東章夫画

理論社　2001

　“まんがなぞとき恐竜大行進”という15冊シリーズで出版された中の1冊です。文章が中心の本ですが、挿絵がたくさん描かれていて、漢字も使用されていますがルビを打ってあります。ひとつの章は数ページで読みやすくなっています。その恐竜の生態と生息環境をきちんと描いた冒険物語で、後ろにその恐竜の解説がイラストとともに書かれています。物語はステゴサウルスの赤ちゃんがお母さんにはぐれ、何とかお母さんを探し出し、再開後は親子で一緒に肉食動物などさまざまな危機を乗り越えてゆく中で成長してゆくというものです。

**このお子さんの様子**

　このお子さんは「遊びや課題をやり遂げることができないということと、友達とうまく遊べない」ということでご相談にみえました。私の印象はとても活発なお子さんだというものでした。お母さんの話によると小さい時からお話を聞いたり、喋ったりということとコミュニケーションを取ることが苦手だったということです。また手掌機能の未熟さから遊びや課題の遂行において粗雑なところが目立ち、危険な遊びを好むということでした。現在は読書が大好きで博物的な知識が豊かであり、特に恐竜が大好きだそうです。またおしゃべりでもありますが相手とのやり取りの中で話題を共有することが困難で、話の順番も混乱しがちで正確な聞き取り、説明がむつかしいことからトラブルも多いとのことでした。当相談室でアセスメントをおこなった結果、物と物・部分と全体の関係の理解、類推などは得意で、順番などの聴覚―運動系の課題は苦手であるという傾向と衝動性の強さが確認できました。

　このお子さんは身の回りにあるさまざまなことを理解することは得意なものの、活動において手掌機能の未熟さと衝動性の高さからストレスフルな状況に陥り遊びや課題を遂行することができないし、そこでの不全感も本児の乱暴な態度に影響しているのではないかと考えられます。

　相手の話をきちんと聞き取りそれに基づいて行動に移るということの苦手さは、上記の問題と相乗して他者との活動の共有を困難にしていると推察されました。

**支援の内容**

　他者との活動場面において協調的なコミュニケーションができるならば、この子どもの生きづらさはずいぶん軽減され、毎日を楽しく過ごすことができるのではないかと考えました。そこでゲームをおこなうことによって他者とのコミュニカブルなやり取りを保障してゆくことにしました。

またこのお子さんが関心を持っている恐竜のお話を一緒に読んでゆくことによって話題を共有することを考えました。お話の順序性の理解に混乱していたようなので、恐竜のフィギュアを使用して動きと場面を確認することにしました。これをお母さんを交えて3人でおこなうことによってお話の再現をコミュニケーション活動を基調とした共同活動とすることができます。またこのお話に合わせたワークシートを作成し、どんなことがあったのかということの確認と、そこでの出来事についてこのお子さんがどう思ったのかを説明してもらうことにしました。

ゲームについてこのお子さんは非常に興味を示しましたが、最初はあわててしまって失敗したり、目先の損得にとらわれて最後に負けてしまい怒りながら泣き出してしまうことがありました。しかし何度か繰り返す中で相手の教示を聞き取り理解して自分の活動を最終的な目的に合わせて調整できるようになり、そうなると常にこのお子さんが一番になりました。

本読みはすらすらできたのですが、このお子さんは話の筋道をおさえるのが苦手であったこともあり、ワークシートへの記述は一言で終わることが多く、また話の筋道の理解は不正確でした。ただ感情表現が豊かにできたので、絵本の登場人物になったつもりで、他の登場人物に手紙を書いてもらうと、その登場人物の立場で気持ちをその理由と一緒に書いてもらえるようになりました。そのようにして言葉をつなげてゆくことを楽しめるようになってきたので、このお子さんの博物学的知識を利用することも考えて新聞記事の形でまとめてもらうことにしました。このお子さんは絵が大好きだったので、絵（写真のつもり）を使っての文章の作成には熱心に取り組んでもらえました。

**考　察**

　このお子さんは強い好奇心を持ち、読書は熱心におこなっていましたが、そうして得た知識を相手にわかるように説明することが苦手であり、その理由は多くの出来事や要素を順番に整理して説明することの困難さからくるものでした。読書以外の課題・活動においても同様で、目的に合わせて課題を順番にこなしてゆくことが苦手であることから取り組んでいる活動をやり遂げることが出来ず、それが不全感につながり、さまざまな遊びや生活場面での放り投げや乱暴さにつながっていました。

**５．小学校中学年のお子さんの支援**

**使用した本**

「おはようオオカミ　おやすみコヒツジ」

ベン・カウパース作　ふくだいわお絵　のざかえつこ訳　くもん出版　2005

　同じ森に暮らすオオカミとコヒツジの間で繰り広げられるさまざまな短いエピソードがまとまられたもので、ひとつのエピソードは数ページで完結したものです。挿絵は大きく、またたくさん使用されており絵本と本をつなぐような作りになっています。本文にはひらがなを中心に漢字が少し使用され、そこにはルビがふってあります。

　個々のエピソードは、元気がよくてやや気短な幼い感じのするコヒツジと、マイペースで気長なオオカミのやり取りの中で目の前に起こった出来事への感じ方の違いと、それが織り交ぜられて自然にひとつの結末に落ち着くというもので、個性の違うキャラクターの交わり合いの中に物語の楽しさを見つけてゆくという児童文学の定番の構成となっています。

**このお子さんの様子**

「主に物語を読む上での理解の弱さを何とかしたい」とのことで相談に見えました。このお子さんは性格は温和、コミュニケーションも良好で、学校では楽しく過ごしています。工作や料理などが大好きで、特に車などのメカニックなところに興味があります。相手のお話はきちんと聞いており、記憶も良好なのですが、集団場面で込み入った説明などの理解は苦手なようです。また生活習慣、さまざまな課題への取り組みに置いて手掌機能の未熟さが感じられます。

当教室でアセスメントをおこなった結果、プランニングと順序性の理解が良好で、聴覚―運動系の課題と、注意に関する課題が苦手であるとの結果が得られました。

検査結果と生活場面での様子を照らし合わせて考えると、主に注意の問題から外界からの情報の入力に困難さがあり、それを受けての動作・表現がうまくゆかないのでしょう。しかし順序性とプランニングが得意なことが心内イメージの組み立て、料理・工作などの創造的活動やメカニックな構造の理解は得意であることの理由と考えられます。

**支援の内容**

　この子が読書を楽しめない理由としては情報の入力においての注意の問題があるのではないかと考えました。そこで視覚訓練ソフト「しっかり見よう」（文理館）を利用して注意、弁別、視点の移動などの練習をおこないました。読書にあたっては書見台を使用して書面に注意を向けやすい工夫をしました。また読書後ストーリーをハンドパペットを使用してお話を再現することによって文章の読み直しとそこでの登場したキャラクターの言葉と動きを確認しました。

　最初本読みはゆっくりで飛ばし読みも時々あり、読みながらジェスチャーで動きをよく確認していました。パペットでのお話の再現では本読み以上に言葉や動きの確認に時間がずいぶんかかっており、該当箇所の探し出しに苦労している様子でした。ワークシートでは「どうしてこうなったのか」などの確認をおこないましたが間違いが目立ちました。しかしお話をまとめることは上手で誰が何をしたということは順番に正確に記述することができました。

　読書とその再現をこの子どもはとても喜び、キャラクターの言葉は感情を込めた抑揚のあるものとして読み上げられました。やがて文章はなめらかに読み上げられ、やがて質問に該当する部分を間違いなく探し出すことができるようになりました。ただキャラクターのその場面における気持ち、言動の理由などの理解と表現は苦手でした。

　そこで登場するキャラクターがこの子が演じるキャラクターに手紙を書くという想定で私が手紙を準備し、この子が演じるキャラクターになったつもりで返事を書いてもらうことにしました。本児はこのやり取りをとても喜び、自分が演じるキャラクターに成り代わり返事を書いてくれました。それは手紙として上手にまとめられたものでしたが、多様な感情の表現は苦手で、そこに第3者の気持ちが入ってくると理解が困難になりました。

**考　察**

　この子は読書をする時に現在読んでいるところと他の文章との関係を確認できにくいことから記述されている内容の把握が困難だったと考えられます。しかしこの子はアセスメントにおいて物と物との関係をとらえる力は備わっていることが確認できていました。また手掌機能が未熟であることからあることからさまざまな課題を達成するにあたって何らかのアプローチを終えた後に作業全体を確認するということをおこなっており、そのことは検査においてプランニングが得意であることにあらわれていました。従ってこの子が読書に苦労しているのは注意の問題であったと考えられます。視覚トレーニングソフトの活用によって文章の全体を見渡すことができ、パペットを使用した話の再現や手紙を書くことによって話の全体の内容を確認できることにより話の全体を読み取ることができるようになったと考えられます。

　しかしストーリーの中でのキャラクターの気持ちの動きをとらえるまでには至りませんでした。この子はアセスメントから聴覚―運動系の弱さにより複雑な状況下での情報の取り込みに苦労していることが考えられました。それは社会的な関係における自分とみんなの気持ちの変化がとらえにくいことにつながったと考えられます。従って本に記述されていないキャラクターの気持ちの動き、ある行動の動機を正確に推測してきちんと表現するところまではできなかったのでしょう。しかしこの子は物語の展開の中でのキャラクターの気持ちの動きの表現にはとても喜んでおり、物語の楽しさはわかってもらえたようです。このことは今後時間をかけて学ばれてゆくでしょう。

**６．小学校高学年のお子さんの支援**

**使用した本**

「ニュートン」講談社火の鳥伝記文庫５１

斉藤晴輝著　板橋繁男イラスト　1984

　子ども向けの伝記の文庫本で、文章が中心でところどころに挿絵が挿入されています。伝記は基本的に一人の登場人物の生涯を軸にその業績と、そこにかかわる人々とのエピソードを記述したものです。「ニュートン」はその生涯を歴史的背景との関係で整理したもので、どんな時代背景において世界が何に関心を示し、そこで彼の関心がどう育ったのかが記述されています。

**このお子さんの様子**

　「国語の問題文への記述が短く内容が薄いということと、会話や作文を通して表現力の弱さが気になる」ということでご相談にみえました。おとなしく表情がやや硬い印象を受けましたが真面目なお子さんでした。図鑑を中心としたものですが本が大好きで、絵を描くことも得意です。全身運動が苦手で、その原因として視覚的な情報の動きの中での取り込みが苦手であると専門家から言われているとのことです。また友達と一緒に相談しながら協調的に遊びに参加してゆくことは苦手です。当教室でアセスメントをおこなった結果、物と物との関係をとらえる力は強く、いろいろな検査項目の中で視覚的探索を必要とする課題の落ち込みと、注意に関する項目の弱さが目立ちました。

　動きの中の視覚的注意が苦手であると社会的な関係の理解は困難となり、そこでの相手の動きと気持ちの動きは見えにくくなると思われます。そのことが状況理解の困難さを引き起こしストーリを表現することの弱さにつながったと考えられます。

**支援の内容**

　視覚面についてはパソコン、手を使っての活動などいくつかの支援を試みたのですが、この子はそれを嫌がりうまくゆきませんでした。この子は絵が大好きだったので、４コマ漫画を使用して内容を表現してもらうことによって記述される内容は増えました。また科学者の伝記であり、内容は理科的なものであったので新聞として内容をまとめてもらうとイラストと合わせて詳細な記述をおこないました。またその内容の確認のために実行可能な簡単な実験もおこない、整理してもらいました。そのことによって博物的な知識に限って詳細な記述ができるようになりました。国語的な文章表現についても同様に努力を重ねましたがなかなかうまくゆきませんでした。

**考　察**

　年齢が上がってくるとこちらの提案したことが受け入れられないことがよくあります。ですからそのお子さんが興味を示す活動を工夫する必要があります。このお子さんはもともと博物的な知識には強く、また視覚的な表現は得意でした。こうした力をうまくまとめるために絵と博物的な知識を援用して文章表現につなげることができました。

**７．まとめ**

　何らかの認知的特性が学習上の困難さを引き起こすことは誰にでもあることです。それが苦手なものであるだけであればいいのですが、活動や社会参加を阻むものとなれば何らかのサポートを考える必要があります。他者と一緒に何かを見て、同じ活動をおこない、一緒に何かを感じてそれを相手に伝え、それを受けとめてもらう。このことは発達の原動力であるばかりではなく、自分の存在を受け止めてもらうことであり、安心感と自信につながるものです。そのことは上記の支援をおこなってゆく中で私が最も感じたところです。

　そのお子さんの認知的特性のありようと、支援者の力量の相互関係によって個々のスキルに関しては出来ることは限られてきます。しかしそのスキルを組み合わせることによる可能性の広がりによって乗り越えてゆけるものは決して少なくありません。

　自分のスキルを生かして活動をやり遂げ、それを他者に認めてもらう。これは人間の幸せの根底にあるものです。何らかの事情でこれを一人でやり遂げられない場合、活動を共にする“ピア”が必要になります。当相談室の存在意義は専門的助言、あるいは基礎学力の形成などではなくここにあります。私も微力ながらこうした子ども達の活動の“ピア”になってゆければいいなと考えています。